法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2024-12-26

〈随想〉『文学近見と遠見と』に誘われるままに

立石, 伯 / TATEISHI, Haku

(出版者 / Publisher)
法政大学国文学会
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
日本文學誌要
(巻 / Volume)
55
(開始ページ / Start Page)
77
(終了ページ / End Page)
81
(発行年 / Year)
1997-03-24
(URL)
https://doi.org/10.15002/00019934

〈随想〉

『文学　近見と遠見と』(*)に誘われるままに

立石　伯

近年の文学作品を読んで、暗鬱な気分や無惨な気持ちに誘われることが多くなった。読みながらそれらの作品世界にひきこまれつつのめりこみ、深い沈思にいざなわれて、大きな喜びや悲しみを享受したり、あるいは魂の昂揚や自分の感受性が揺り動かされて眼が洗われるような心的な体験もすくなくなった。人間と存在の意味や価値、世界の在りようなどに怒りや絶望や歓喜や魂の戦慄というべきものをそれらから享受できないのである。つまり、自分の内面や世界や宇宙などへとさらにじっとみいるきっかけを示唆してくれる読書体験はきわめて稀になったということにほかならない。

もとより、近年の文学界や芸術領域は死の砂漠でも無の廃墟でもなくて、高度な達成を示したり、きらめくようないい作品もあるのは確かなことで、わざわざ断るまでもない。そうでありつつも、相対的に精神営為・葛藤や創造行為に衰弱や退化が進んでいるので、受入れの間口を広くとって、丁寧に最後の最後までつきあっていいところを見いだしていく忍耐もだんだんなくなるのである。したがって、現在のものを遠く離れて、逆比例するかのように、かつて読んで感銘をうけた小説家や詩人達の書物をひもとく時間が多くなったということが生じる。これを称して一種の現在からの逃避、興味の喪失といいうるか。これらにつきあう時間があったら、自分の不十分な思考をさらに深化しなければならないし、つまらぬことや日常的な仕事に忙殺されて等閑にしている自分自身の想像世界をさらにさらに拡げる努力をしなければならぬ、としきりに思うようにもならざるをえない。これからさき何年間、何を、どのように、どれだけの深みで、そしてどれだけの高さで追究できるのか、と反省することしきりである。五十歳代の後半になったための生命力の枯渇や好奇心の衰退のせいかもしれぬ。

ところで、小田切秀雄（私の恩師で先生と敬称をつけるべきであろうが文章の性質上略して、氏、と便宜的に呼ぶ）の書物をなんであれ読むと、このような自分の姿勢がつねに厳しく批判あるいは唾棄されている気がする。わたしは若年寄を決め込んでいるのではないし、諸芸術ジャンルの裡でも文学に対する盲愛は他の人にひけを取らないものだと自負しつつも、そう感じざるをえない。本書も厳しい批判力を内包している。振り返って再認するまでもなく、すでにして小田切秀雄は八十歳の傘寿を過ぎ、これまでにもさまざまな病気に堪え、克服しつづけ

てこられた。さらに昨年人生の同行者として、領域が異るとはいえ従事する仕事を互いに尊重しあう最も頼りにしあった夫人を亡くされもした。本書収録の文章は、ほぼ重篤の夫人を看病しつつの営みである。これは忘れがたい。

こういう精神的位置・生活上の条件において、しかしながら、あたかも二、三十歳代の潑剌たる青年のごとく、背骨をきっちりとのばして《初心》を貫きつづけるのである。それをまず一口でいっておけば、文学の現場とその歴史、人間の生き方と在り方、文学的思想や社会観や時代と歴史あるいは世界の動向などに真摯にかかわりつつ、本質的な位相で正面対峙していく意志と志向である。

本書には「社会主義と文学、その他」という副題がつけられていて、文学の「近見と遠見」の幅とありようを示唆する。巻初に「ひとこと」がのべられ、近見と遠見、たとえば近見ならば近くを見ることと短見といった肯定・否定の両面が端的に記されている。氏はここですでに自己の文業の両面に極めて自覚的であることを暗示する。相対化をなしつつも、相対的な局面で思考停止する愚をどうにかして打開しようとする意志が同時に語られたということにほかならない。私見にしたがえば、文学芸術の初心を明快にすることにはじまり、ぎりぎりの果てまでの認識のアラベスクが繰り拡げられているといえる。『私の見た昭和の思想と文学の五十年』という氏の大著の補完・展開の役割をしているといいかえてもよい。

いわば著者が文学の同時代に入ったという昭和八年・一九三三年以降の文学・思想に対する考察の核心を継承しつつ、さらに新たな観点と切口、徹底的に熟慮すべき文学・思想的課題の提示だといいうる。それは、特に一九八〇年代後半からの時代や世界的動向の変化・転変の激化に対応する。「社会主義」に関していえば、九一年ソ連邦の解体、中欧「社会主義」諸国の変化と分化、八九年中国の天安門事件を初めとする政治・経済上の変化、ベルリンの壁撤去などに象徴される東西冷戦関係や構造の激変である。もとより、一七年の革命成就の初期はともかくも「社会主義」はスターリンの書記局奪取以来の遠い昔からして無力で、思想的・文学的な考察の対象にはならなくなっているという立場もありうる。氏はそのような文学的認識の可否を正面にすえて闘っているのである。いわば、常識的なもの、時代の波に流されているもの、いわゆる文学的な洞察力の稀薄になっているものなどに対立する厳しい自己検証を核にした文学的精神の発露をここに見ることができるのである。

「わたしは、人間解放を熱く求めて、その具体的な実現の道として共産党系の左翼学生運動に近づいたのだったが(中略)末端に参加し多少の献身もしたが、四分の一世紀後、つまり佐多がこの長編を作品として書いた時期には、往年の行動を半ば肯定、半ば否定というふうに変ってきており、それはその後さらに強くなってきている。」(「佐多稲子と昭和文学の基本の問題」)

氏の立場として実に率直な見解である。しかし、これから氏の文章を引用するにさいして留意しておきたいが、きわめて原理的・本質的・厳密な論の運びなので、ある一部分を引用すると、きわめてリゴリスティックな印象を喚起する。これが氏の

文体、思考法の特徴の一つといえばいえるかもしれない。しかし文章の展開力、論述の複素的な強度がほぼそれを支えているので、論理が突出しているのではない。のちに示すように、思考の柔軟性がそれを側面から支えてもいるのである。次の文章もしかりであって、その思考の拡がりの様相をよく示している。

「選択可能性の束をひろげてゆくこと、徹底的にそれを追求することは、貫徹する必然性そのものをモディファイし、さらには大はばに規制することがある。歴史においての人間の自由とは、そういうものだ。個人生活においてのその追求から、さらには社会生活・階級生活・集団生活等においての追求にいたるまで、選択可能性の束をひろげ、それを生きることにおいてのみ、人間の自由はある。」（「選択可能性の束（たば）」）

ともあれ、「人間解放」「人間の自由」などという本質的な問題が厳しく問いつめられる。こうした関心が欠如している現在の若者たちには違和感を喚起するかもしれない。それはどうでもいい。私たちはまだ自然や社会や世界や宇宙のほんの部分しか知らないし、より卑近なことをいえば未知だらけの肉体にすらすっぽりと取り込まれているのだから、このような根源的な欲求に対する渇望は内心でうずきつづけているであろう。もとより氏の自由観についていえば、私自身にはすこしく異った別の観念がある。

戦後文学者達には、創造理論・方法意識、批評や文学理論にかんしての明確な基準、基軸があった。いや時間と歴史を閲してきている文章や考え方などはなべてそうだといえる。氏と近しい本多秋五ならば「批評の基準はなくてすまされない」というし、埴谷雄高ならば「批評基準の退化」というであろう。もとより氏らが問われるならば「人類学的等価」とか「古くからドストイェフスキイをものさしにしてきた」と主張する。そうだとしても、批評の絶対的な基準はこれこれこうだというのではない。やはり氏も同様である。一定の基準を云々しつつも、同時に対象に即して柔軟に対処していくのである。いわば、自分の肉感的な感受力にはじまり、右に示したような生と存在の在り方のある究極に亙る拡がりで論述されるのだといいうるであろう。そこに一本芯を通すかたちで『基準』が明確に内的に保持されているのである。

本書には引用で示した右の文章のほか、「言葉と自我」「〝ソビエト〟ということばの死、再生へ」「芥川賞の実験小説と文学の条件」「ゲーテとベートーヴェンの深い違和」「戦後文学の半世紀、その他」「自由への渇望」「もし中野重治が生きていたら」など、氏の批評に目を通したことのある人ならば、なるほどこういう面に文学的考察の手をのばしているのかとほぼその方向性について納得できるとともに、その世界の幾分かは推察可能であろう。つぎに引用でいくらか示す。

「しばらく前までの西独の大統領ワイツゼッカーの見識もみごとだったが、ハヴェルの見識は政治家でもある者の自己省察として、文学的にもきわめて高いものである。――政治が人間的なものになりうる、という可能性については、ロシアやチェコでの経験からして長期の展望でいえばやはり楽観的であることができる、とわたしは考えている。」（「ヴァーツラフ・ハヴェルの静かな衝撃」）

「プロレタリア文学のすぐれた作品がいまなお新鮮な生命を持って生きていて、消えることがないのと同じように、中野重治も消えないし、社会主義も消えない、とわたしは思っています。中野がもし生きていれば、かれは、スターリンらによって裏切られていないマルクス主義、裏切られていない社会主義、それの先頭に立っていたレーニンの立場というものを、あらためて強くおし出して、それを現代的状況のなかに新しく展開し、次のような無数の人びとともに進もうとするでしょう。」（「もし中野重治が生きていたら」）

氏の「楽観」論にはもとよりその背後に個体化・歴史化された強烈な自己凝視がともなっている。ロシアやチェコの民衆がかつて社会主義やその名の下でなされてきた非人間的なこと、官僚主義支配や特権階級の抑圧などに深く傷つき、それらを徹底的に憎悪している点にかんして充分な想像力がとどかなかったことについて、次のようにのべる面にもよく示されている。

「わたしは今回ことばになりにくいほどの強いショックを受けています。この点では確かにわたし自身に激しい自己批判が必要です。人ごとのように言うことはできない。」（右引用後者同）

このあたりにのべられている認識こそ、氏の現今の急務の解明課題にほかならない。それは社会主義やソ連や東欧諸国にかんする論のなかで屢々厳格に自己要請されていることからも自明のことであろう。それは単に現状認識とその派生事態ではない。文学の現状の選択と価値意識、歴史認識をどのように展開しかつ責任をになうかという問題である。ということは、これらに関心を抱くものにとって氏の認識について論議の別れる側面のひとつだといえる。

氏の楽観論には明確な根拠があって、いささか悲観的なわたしとは異っている。というのも、世代論に還元できないが、氏が同時代を認識した三三年の時期とそれ以降の歴史・現実体験、わたしが同時代をわずかであれ感受しはじめた五八年以降との時代・状況的差異も大きな作用をおよぼしているようである。この頃、ハンガリーやポーランドの暴動（革命）とその圧殺の記憶が濃厚であり、特にドストエフスキイ、ランボー、埴谷雄高、石川淳などの読書が決定的であった。それらは整然と系統化されたものではなくて、混沌たるもの、錯乱した情念が支配的であったにしても、である。社会主義やソ連や共産党に対する強い懐疑が心のうちに渦巻いていた、そして、六〇年の安保闘争へと連続したということができよう。しかし、マルエン全集、レーニンの著作、それに関連するものなどはよく目を通した。またわたしは中野重治の作品は読んでも、氏や本多秋五などのように彼が一つの判断の参考や基準的なものになるという精神的環境にはなかった。たとえば、武田泰淳が「L恐怖症」で戯画化したように、ひとつの厳格な評価の機軸があって、恐怖のもととなる「あの種の存在、つまり批判」としてのLには魯迅とともにリテラチュアが含まれていたのであった。が、さらに彼は「ナカノジュージとかいううるさいの生きてるが、こりゃ中国文学じゃないし」という意味での基準ともならなかったのである。

この書物ではなく別のところで、氏がたとえば埴谷雄高の政治論のある意味での極限性を批判し、あるいは『幻視のなかの

政治』を政治論の古典と批評するとき、その立場は実に明快である。埴谷雄高と権力論、共産主義論、形而上学についての考えなどが異っていても、いや異っているからこそ、おなじ「近代文学」の同人としての文学と政治に対する理念や位置がお互いに明確になるのである。埴谷雄高の極端といってもいい反権力の立場、反官僚制、国家・国境消滅論、反スターリン主義などはそれ自体きわめて独自な政治思想である。それを批判する立場も当然独自な位置を占めるのであって、これをいいかえれば、この差異が戦後文学の大きな幅であり、わたしが戦後文学はすでにして「党派」的な理念ではなく、ひとつの大きな「文学」そのものの潮流だといいたいのもこの点にかかわる。政治を論じつつも、同時にもっと広い文学の領域が想定されているのである。もとよりここには、かつての、「近代文学」と中野重治が中心のひとりとなった「新日本文学」との文学と政治についての認識の本質的相違が背景となっている。そして、これは時代の変化とともに変質していった。

小田切秀雄がこの書題を「近見と遠見」と名づけたのは、右の見地からいってもきわめて象徴的な配慮がほのかにみえる。ここで取り上げられた主題的なものは、その性質から文字通り近くと遠くから同時に、いいかえれば思想的に厳格な側面と現実の流動の転変を両手に握りしめて、ぐいと一挙に解読しなければならぬものばかりだからにほかならない。現在、世界の思想的・政治的な動向が、灰色で、またナショナリズムや官僚支配が顕著になっているとき、氏のようにそれを正面から批判するのは必当然の精神営為である。冒頭にのべたように、思想界や社会ばかりでなく、文学界もきわめて沈滞していて、渙発的、教示的な文学のさらなる展開がひたすらに待たれているのである。つまり私たちは、自らの「近見と遠見」をさらに省察し、二十一世紀を眼前にした自己や世界を徹底的に凝視する必要がある、それこそが求められているのだと、氏は語りかけているといっても誤解はあるまい。

ともあれ、氏の書物をひもとくことは、自分や世界の過去と現在と未来のさまざまな問題を考える引金になる。そういう面で緊張を強いられ、重苦しくも楽しい。本書で教示された文学の「新しい可能性への挑戦」「実験小説のすすめ」「マルクスのルネッサンスが必要であり、社会主義のルネッサンスが必要だ」といった諸種の見解や主張には深い同感を覚えるのである。そして、その厳しい批判の眼差しも同時に大切で貴重なものだと称揚できるであろう。「あとがき」にしたがえば、大岡昇平の『成城だより』に倣って『目黒だより』を書いていきたいということだったようだが、これも大変うれしいことである。『成城だより』は当時の時代と文学の批判・批評として刮目するに足る書だったからである。本書もまさしくそのような相貌をたたえている真摯な文章群にほかならないということができる。総倒れになりつつある大切な戦後文学者の一人としてさらに多く書き続けてもらいたいものである。

（文学部教授）

（＊）『文学　近見と遠見と』

▽著者・小田切秀雄・法政大学名誉教授

△一九九六年集英社刊・二、二〇〇円